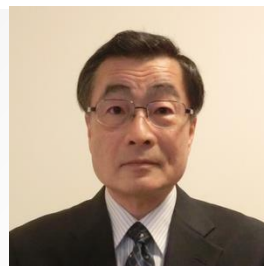


「全鍍連」 2019年 7月号 巻頭言

全鍍連 副会長 草間 誠一郎 (株)三ツ矢 代表取締役)

「全鍍連の勝算」



山田全鍍連会長の元で令和元年の全鍍連活動がスタートいたしました。振り返るとめっき業の勝ち残り（勝算）を目指して「めっき業ビジョン 2012」（当時は伊藤全鍍連会長でした）作成から7年がもう過ぎました。

最近発刊された「日本人の勝算」という本の作者のデービッド・アトキンソンさんは、イギリス生まれ、元経済アナリスト、茶道に打ち込み日本の国宝や重要文化財の補修専門の小西美術工藝社へ入社し、社長となって経営を建て直し、日本の文化財の専門家として、日本の文化財政策・観光政策に関する提言をされており、日本政府観光局（JNTO）非常勤の特別顧問にも就任しています。

この本では118人の外国エコノミストのデータを用いて現状の日本分析と将来予想そして日本人へ勝ち残りのための提言をしています。

日銀はガンバっていますが少子高齢化による人口減少と市場縮小によるデフレの力は長期的には深刻であり、日本は生産性向上と「高付加価値・高所得経済」をめざして、①輸出増大（観光客の呼び込み）②中小企業の企業規模拡大、③最低賃金引き上げ、④人材育成システムの確立をしていくことが必要と提言されています。

私にとって耳が痛いのがグローバル基準から見て人材評価では世界で第4位の優秀な日本人がいる日本の生産性は世界第28位と低迷しており、結論として中小企業の経営者は生産性を向上しもっと真剣に頑張りなさいということです。（私がムカツとするような表現でしたが）「三丁目の夕日」世代の私は比例直線的变化（ $y=x$ ）を体験してきており、そのイメージが邪魔をして、指数曲線的劇的变化（ $y=2x$ ）の入口をとらえ損なって勝算を作り損なうのではと最近心配しております。

毎年組合員の減少が報告される中で、決算では皆様のご協力と事務局の努力のおかげで黒字となりあらためて感謝を申し上げます。しかし今後組合員減少に歯止めがかかるのか、全鍍連の収入は現状維持で変わらず例年の事業を継続していくのか、あるいはすでに指数曲線的劇的变化の入口であり、「全鍍連の勝算 = 各組合の勝算 = 日本のめっき業の勝算」を考えてもっと事業のさらなる変革を行う時期なのか、皆様はどう思われていますでしょうか。

今回若い世代からドイツハノーバーの展示会への出展が提案され実行されました。単独ではチャレンジが難しいことを全鍍連がバックアップしてできるようにする。

こないままでなかった提案ができ、指数曲線の変化に対応出来る若い次世代に早くバトンタッチして柔軟な考えで

「全鍍連の勝算 = 各組合の勝算 = 日本のめっき業の勝算」を作り上げてほしいと考えるこのごろであります。